

従属節における丁寧体コピュラの自然さ

—統語環境と役割語の濃淡—

Naturalness of Polite Style Copula in Subordinate Clause: Syntactic Circumstances and Strength of Speech Character

乙武香里（神戸大学大学院生）

要旨

本発表では、話し手らしい言葉づかいと統語の関係を考察する。「役割語」（金水 2003）としてコピュラ「デス」を捉え、従属節内のデスの自然さの観察と分析をおこなう。このアプローチにより従属節の性質の詳述が可能となる。分析を通して、従属節の独立性を再解釈し、複文を発話行為の単位で捉えることを提案する。

キーワード：日本語文法；役割語；発話キャラクタ；丁寧形コピュラ；従属節

謝辞：本発表は、日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究(A)「状況に基づく日本語話しことばの研究と、日本語教育のための基礎資料の作成」（課題番号：23242023, 研究代表者：定延利之）の援助を得ている。ここに記し、謝意を表する。

1. はじめに

現代日本語社会には、ある言葉づかいが特定の人物像を想起させる、あるいは、ある人物像が特定の言葉づかいを想起させるという現象がある。このような日本語の特徴は、「役割語」、「発話キャラクタ」（定延 2006; 2011）として研究されている。役割語の定義とは次のようなものである。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

（金水 2003, 205）

役割語は、マンガや小説などの非現実的な世界のものであると考えられがちである。しかし、役割語は日常の話しことば一般にも見出せるものである。日本語社会で無意識的に共有されていることばと人物像の結びつきは、発話と話し手像の結びつきでもあり、日常の言葉づかいと話し手らしさの関係にも反映する。ことばと人物像の結びつきの、人物像の側に焦点をあてた「発話キャラクタ」は、どのような者として話す

かという、話し方やふるまいの選択から生じる話し手らしさを指すものでもある。

敬語に関してまとめた菊池（1997）では、丁寧体の使用には個人差があり、親しい間柄でも、その人の品格を保つためにデス・マスを使う人も少なくない、ということを描いている。「品格を保つために同じスタイルを貫く」という話者のエゴは、発話キャラクターに置き換え可能であり、デスを一つの役割語と捉える根拠となる。

本発表では、常に丁寧な態度で日本語社会に臨む人物像を『上品な女性』キャラクターと想定し、従属節に現れるデスの自然さを役割語、発話キャラクターの観点から捉える。これにより、従属節の性質の詳細を分析し、複文を再考する。

2. 従属節の独立性とデスの生起可能性

独立性の低い従属節の中では、丁寧形が現れにくく、独立性の高い従属節や引用節の中では丁寧形が現れる（野田 1989）ということはよく知られている。引用節内の「です」の自然さが直接引用と間接引用で異なることも、この考えから説明できる。

- (1) 優秀 {だ／です}。
- (2) 優秀 {だ／??です} と言っていました。
- (3) 「優秀 {だ／です}。」と言っていました。

しかし、独立性の低い従属節への丁寧形の出現は、「現れにくい」と指摘されるように、絶対的なものではない。次のように、独立性が低い場合でも丁寧形は可能である。（【 】は連体修飾句を示す。以下、同様。）

- (4) 【誰が申しました言葉】がお気にさわったのでございましょう。
(田窪 1987, 45 本稿で【 】を付加)

また、丁寧形の挿入に関しては、独立性の高い従属節は丁寧度を主節の述語に一致させるということが、これまでに述べられている。

- (5) 田中さんがいましたけれど、北海道へ行くのでしょうか。
- (6) 田中さんがいたけれど、北海道へ行くのでしょうか。
- (7) *田中さんがいましたけれど、北海道へ行くのだろうか。

(田窪 1987, 45)

「けれど」（以下、ケレド節とする。）は独立性が高い節とされ（南 1974; 田窪 1987）、ここでも従属節の独立性とデスの挿入可能性は矛盾しない。しかし、従属節が丁寧形になった場合、そしてその場合のみ、なぜ主節も丁寧形に揃えなければならないのだろうか。上述のように、従属節の独立性、すなわち、文らしさと丁寧形の生起可能性については、しばしば指摘があるものの、文らしいものが並ぶと両者を一致させな

ればならないということの説明は為されていない。

また、(8)はカラのつく原因・理由節（以下、カラ節とする。）が主節を言い終わった後に述べられるものである。主節と従属節が分離される場合、カラに前接するコピュラは丁寧形のデスでもよい。主節とカラ節が別のものとして発話されるとカラ節の従属度が下がり、より独立性の高い発話となっていると言える。

(8) 中止です。雨ですから。

しかし、逆の見方をすると、(8)は普通形ダが前接した「だから」でもよいわけである。独立性の高さから「ですから」が可能であるということは、「だから」で十分である統語環境で「ですから」が選ばれるということまでは説明しない。

上記のことを発話キャラクタの概念を取り入れて考えると、丁寧さを入れる難易度が高い統語環境で丁寧にできたのであれば、難易度が低い統語環境では丁寧さを保たなければならないという解釈を導くことができる。このとき、従属節の独立性は、丁寧さ挿入の難易度の点で丁寧形の自然さの基盤となるものであり、従属節の独立性と従属節内の丁寧形の出現の関連は否定できない。ケレド節や主節と分離したカラ節で丁寧度の一致が一方向的になるのは、日本語母語話者による丁寧な態度で会話に臨む話し手像（『上品な女性』キャラクタ）の言葉づかいに対する期待と統語的環境による難易度のためであると捉え直すことができる。

3. 原因・理由節（カラ節）

3.1 文の焦点位置

カラ節では、デス・マスが現れ得るとされている（南 1974; 田窪 1987）。しかし、いつも丁寧形コピュラが許されるわけではない。日本語の複文の自然さは、焦点の位置が関与していることが多い。まずは、カラ節におけるデスの自然さを、焦点の位置を確認しながら考察する。

(9) 雨 {だ／です} から中止です。

(10) 雨 {だ／??です} から中止なのですか。

日本語では、原則的に文末の述語以外に焦点が置かれることがないが、ノが加わることで述語以外の焦点化が可能になる。焦点位置については、疑問文や否定文で確かめることができる（田窪 1987; 野田 1997）。（以下、ノのスコープを[]で、焦点をで示す。）

(11) ??彼がいるから、北海道大学に行きますか。

(12) [彼がいるから]、北海道大学に行く]んですか。

（田窪 1987, 43 本稿で[]を付加）

上の(11)は、疑問の焦点がカラ節がなく不自然な文となる。しかし、述部にノを入れた「んですか」にするとカラ節に焦点が置かれ、自然になる。

ここで注意が必要なのは、(11)のような動詞述語文と異なり、(9)のような名詞述語文の「だから」場合、ノの挿入なしに文の内部で連体修飾句が成立し((13a)参照)、カラ節の焦点化が可能になる((13a')参照)という点である。

(13)

a. 【雨だから中止】です。

a'. 雨だから中止です。

これは疑問文の環境でも同様である。「だから」の場合、制限修飾節として成立可能で、ノの有無に拘わらず、疑問の焦点が述部ではなくカラ節に置かれ、疑問文として自然になる。

(14) 雨だから中止(なの)ですか。

3. 2 「ですから」の疑問文と焦点化

「ですから」の場合は、非制限修飾節の解釈しかできない。このことは統語環境による自然さの違いをもたらす。「ですから」は、主節が疑問の(15)、(16)では不自然だが、肯定平叙文ではノが挿入された場合でも自然である。

(15) ??雨ですから中止ですか。

(16) ??雨ですから中止なのですか。

(17) 雨ですから中止です。

(18) 雨ですから中止なのです。

つまり、名詞述語文で「ですから」が不自然となるのは疑問文という環境であって、ノの有無の影響は受けない。文の内部構造をみると、「ですから」の場合、制限修飾節にはならず、疑問の焦点は述部にある。質問する前提に焦点があり、質問によって知りたい部分(中止の理由)に焦点が置かれないため、不自然な質問となる。

(19) ??雨ですから中止ですか。

(15)、(16)、(19)の疑問の焦点のズレによる文の不自然さは、疑問という発話行為をおこなうときに「ですから」が不自然となることを示している。

なお、(18)の「雨ですから中止なのです。」のノのフォーカスは、下の(20)のようになる。ノの有無に拘わらず、主節が平叙文のときに「ですから」が自然となることは、

「ですから」と平叙文が並んだ発話では、従属節と主節で異なる行為をしているということ、そして、「叙述する」もしくは「陳述する」という行為をおこなう理由を述べるとき^{注1}に「ですから」は不自然とならないということを示す。

(20) 雨ですから[中止な]のです。

3. 3 疑問の行為とならない疑問形式

疑問文の分析より、主節で疑問という行為を為すとき、カラ節は一つの発話行為とならず「ですから」が不自然となることがわかった。疑問の焦点の違いによる発話の変化は、次のような発話でも観察できる。疑問文と同じ形式であっても、その主節末が質問調とならなければ、つまり、疑問ではなく把握として発話されれば、「ですから」も可能となる。(↓は下降音調を示す。)

(21) 雨ですから中止ですか↓。

そして、『上品な女性』のキャラクタ、さらに『老紳士（上品な老人）』や『謙った部下』であれば、むしろ「ですから」の方がよい。

(22) あら、雨ですから中止ですか↓。

(23) ほほう、雨ですから中止ですか↓。

(24) はあ、雨ですから中止ですか↓。

下降調で把握する発話の場合、従属節の「雨」は聞いて得た情報を表す。「雨ですから」は、疑問という行為では疑問の焦点である理由とならず不自然であったが、把握という行為では問題ない。これは、「雨ですから」で「聞いたことを受容する」という行為をおこなっているからである。そのため、聞いて相手を立てることが得意な『上品な女性』や『謙った部下』、聞いて相手を受け入れたり感心したりする『老紳士』の発話で自然になると言える。

「だから」よりも、むしろ「ですから」の方が発話キャラクタにとって自然ということから、カラ節にデスがついたもの、つまり前件の発話行為と発話キャラクタに強い結びつきがあり、役割語が濃いほど従属節の独立性が高いことがわかる。この例は、発話行為を基準に発話キャラクタも存在しているということを示すと同時に、発話キャラクタから考えることで複文の性質がより明らかになるということも示している。

4. 条件節（タラ節）

4. 1 発話の言及対象

注1: Sweetser (1990) では“epistemic domain”、前田 (2009) では「判断根拠」の読みに相当する。

次に、タラを含む条件節でのデスの自然さを考察する。ここでいう自然さも、『上品な女性』の発話としてであって、『上品な女性』であれば「でしたら」が期待されるだろうということである。下記の(25)～(28)では、(26)でのみ「でしたら」が不自然となっている。(26)のような発話では、「だったら」と言っても上品さは損なわれない。

(25) その方も優秀 {だったら／でしたら} いいのですが。

(26) 私も優秀 {だったら／??でしたら} いいのですが。

《銀メダルを手にインタビューに答えているオリンピック選手をテレビで見ながら》

(27) あのメダルが金色 {だったら／でしたら} 申し分ないのですが。

(28) あなたが女性 {だったら／でしたら} いいのですが。

(25)～(28)の条件文の意味を確認すると、(25)は仮定とも反実仮想とも解釈できるが、その他は、反実仮想の意味としか解釈できない。よって、(26)の「でしたら」の不自然さは条件文の意味だけによるのではないことがわかる。

「でしたら」が不自然となる他の要因として考えられるのは人称である。(26)のみが一人称であり、「でしたら」の不自然さは、話者自身に関する仮定条件か話者以外の人物・事物に関する仮定条件かに起因するという予測ができる。常に上品さを保とうとする話し手の発言であっても、自分自身についての言及では、「でしたら」が不自然になると考えられる。

4. 2 話者自身に言及する「でしたら」が自然になる場合

先に話者自身について言及するタラ節で丁寧な言い方が不自然になるという予測を立てたが、話者についての言及であっても「でしたら」が自然になる場合がある。会話文脈を想定して確認する。

次の例は、味覚に関する嗜好を答える実験場面で実験者 A が(29)と指示し、被験者 B が(30)と応答するという会話である。

《味覚の実験で好みの味の刺激には「好みである」と答えるように指示。味覚を確認した後に。》

(29) お好み {だったら／でしたら} 仰ってください。

(30) はい。私の好み {だったら／??でしたら} お伝えします。

ここでは、被験者 B が味覚刺激を受けた後に何も言わないので実験者 A が念押しで「好みであれば言うように」と声をかけるという場面を想定されたい。この場合、被験者 B は既に味覚を得ており、好きか嫌いかの判断ができる状態である。したがって(30)は、味を確かめたけれども「好みではない」と判断した状況で事実とは反することを仮定

する発言である。話者にとって事実関係は確定している状況で、このとき、「だったら」は自然だが、「でしたら」は不自然である。これは、(26)の例と同じである。

同じ発言を事実関係が未確定である仮定にすると、「でしたら」の自然さが上がる。上記の実験を、味覚を感じる前の状況に変更する。時系列でいうと(29)と(30)の会話の前の段階ということになるが、被験者 B の発話は次のように変わる。

《味覚の実験で好みの味の刺激には「好みである」と答えるように指示。味覚を確認する前に。》

(31) お好み {だったら／でしたら} 仰ってください。

(32) はい。私の好み {だったら／でしたら} お伝えします。

まだ味覚を得ず、好みであるかどうか判断できない状況では、「でしたら」が自然になる。つまり、話者自身のことであっても、事実がまだ確定していない場合は丁寧な言い方でも自然になるということである。

さらに、(32)は実験者 A の発話を受け入れての発話という点に留意したい。実験者 A は、被験者 B の(32)の発話時には被験者 B にとって聞き手であるが、聞き手の発言を受けて自分自身のことを仮定するという状況に変わっている。聞いたことを受容しての仮定で成立するというのは、次の(33)のような例でより明確になる。

《警察に犯人だと疑われた『上品な女性』の発話として》

(33) 私が犯人でしたら、どのようにして午後 8 時にパーティ会場にいることが可能だったのでしょうか？

上記から、自分の情報か否かの違いに加え、事実の確定／未確定の違いが丁寧形「でしたら」の自然さに関わると言える。そして未確定の場合とは、対話の相手から得たことをもとに仮定するという行為をおこなうときである。

4. 3 丁寧に言うということ

ここまでで、話者自身に言及する場合であっても、対話の相手から得た情報をもとに仮定する場合は「でしたら」が自然になることがわかった。ここで対話相手から聞いた過去の話を仮定する表現を分析したい。『上品な女性』の発話としては、(34)のように、タラ節が「だったのでしたら」なる。

(34) ここが昔、海だったのでしたら、海水魚の化石も発掘されるのでしょうか。

(35) *ここが昔、海でしたのだったら、海水魚の化石も発掘されるのでしょうか。

(36) *ここが昔、海でしたのでしたら、海水魚の化石も発掘されるのでしょうか。

(36)のように「でした」の重複が許されないことから、丁寧にするのは前件の中で一度

だけであると言える。また、(34)、(35)より、「でした」は対話の相手が話した内容ではなく、仮定することに係っていることがわかる。

以上のことから、『上品な女性』に期待される「でしたら」は、仮定するという行為を丁寧に行っているという結論が導ける。そして、これらは聞き手の情報を受けての発話に現れるものである。「でしたら」が自然になる状況は、聞き手がいるからこそ自分に相応しいふるまいとして発話行為を丁寧にするということを反映していると言える。

5. まとめ

丁寧なコピュラのデスを役割語と捉え、『上品な女性』キャラクタによる発話という想定をもとに、カラの原因・理由節、タラ条件節に現れる「でしたら」の自然さを考察した。カラ節においても、条件節においても、節ごとに為される発話行為によって自然さが変わることがわかった。このことから、発話行為の単位で複文を考えるということを提案したい。

タラ節の考察で明らかにした、話し手自身の確定事項に言及することから起こる不自然さには、自分が謙り、特定の人物を敬って表現する謙譲語や尊敬語のシステムとの関連が窺える。日本語教育の面では、微妙な敬語の使い方を習得するという点で重要であると言える。ただし、本発表で考察した表現は丁寧さの上限を示すものでもあり、無論、すべての日本語学習者が自分の話し方として取り入れるべきだと主張するつもりはない。しかし、役割語や発話キャラクタの研究は、日本語文法やコミュニケーションを考察する上で無視できないものであり、学習者が自然な話し方、自分らしい話し方を習得するための糸口ともなり得ると言えるだろう。

【参考文献】

菊地康人（1997）『敬語』講談社

定延利之（2006）「ことばと発話キャラクタ」『文学』7(6), 岩波書店, 117-129

定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂

Sweetser Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5), 37-48

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

野田尚史（1989）「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版, 131-157

前田直子（2009）『日本語の複文 —条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店